

自動化、低騒音を実現

東亜利根ボーリング 来月から販売開始



新型機「ソニックNEO」

な土質が互層状になり、掘削には技術者の施工経験が作業効率に大きく影響していた。特に都心部では騒音対策が強く求められ、機械の能力を十分に発揮した施工がしにくい課題もあった。

新型機は従来機と比べエンジン騒音で11㍻、掘削作業音で10㍻を削減しており、国土交通省の超低騒音型建設機械にも指定される見通し。都心部では低騒音化により、機械の掘削能力を最大限まで活用でき、掘削能力は2倍程度まで向上する。自動化による安定した作業の実現は作業人数の削減にもつながる。回転数は最大値を引き上げ、ロッド径は最大273㍻まで対応可能という。

消音装置はアイ・エヌ・シー・エンジニアリング（東京都新宿区）が製造を担う。

同製品は、同社の地中熱向けボーリングマシン『ソニックドリル』シリーズの新型機『ソニックNEO』として販売する。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）

との2年半にわたる共同研究として開発を進めてきた。地中熱のボーリング掘削は径が200㍻以下と小さく、しかも地下100㍻まで施工する。国内の地層はさまざま

東亜利根ボーリング（東京都港区、伊藤春彦社長）は、地中熱設備の掘削作業を自動化する低騒音のボーリングマシンを開発した。自動化によって作業員の熟練度に左右されず施工品質を確保できるほか、低騒音の実現によって都心部でも機械能力を存分に発揮する道筋を整えた。国内の地中熱利用が拡大傾向にある中、7月から販売に乗り出す。同社は「地中熱導入コストの20%削減に向け、新技術を先駆けて提供していく」（伊藤社長）方針だ。

